

事例を読む

気ままな園芸生活のススメ

森光康次郎

はじめに

大学の教育と研究に携わっているとはいえ、日々、研究室で食品の化学成分に関する研究に身を投じている。この拙文が歴史ある本誌にて「幼児の教育」を語るには不十分な内容であることを、何とぞお許し願いたい。しかし、自身の息抜きや趣味で始めた大学における園芸が実はなかなか楽しくもあり、今回、寄稿の機会をいただいた。

唐突な内容だが、三月に震災に見舞われた教育現場を新年度の四月から平常どおりスタートするため奔走する先生たちの苦労や問題点が報道されていた（NHK「クローズアップ現代」より）。ある先

生の談話が最後に紹介され、心を惹かれた。それは、「学校を平静時に戻そうと走り回っているうち、ふと、学内の花壇のシクラメンがしおれているのに気がついて、ようやく水をやることができた。でも、この行動で自分たちが以前の平常時に戻りつつあることを初めて実感できた」という内容だった。種を蒔いたり、花を育てたりできる状態や生活環境とは、まさに心に「余裕・ゆとり」がある状態そのものであることを示している。それは大人とか幼児とか年齢には関係なく、花を育てる行動そのものが、きっと人間の普遍的な欲求の一つであるのだろうと個人的には考えている。また、戦時下や被災下では花が育ちにくいように、生活環境が健全でなければ、花を育てるといふ行動が成り立たないのは自明の理である。被災された東日本、関東の地で、再びたくさんの花が育てられ咲く日が来るのを祈念している。

さて、いつのころから花を育てることを好きになったのか自分ではわからないが、年齢を重ねたころより、木や花に慈しみを強く感じるようになった。

女子に対して男子の場合、若年のころから花き類や観葉植物へ興味を示さない傾向があるのは周知のことである。しかし、自分でも小学校でアサガオを育てて観察日記を記した記憶は楽しい思い出である。個人的には、祖母に畑でニンジンやトマトの栽培を見せられ、ニンジンの小さくて黄色くかわいい花を印象強く覚えている。こういった幼少時の経験は、やはり「ゆとりを知る機会を得る」という意味で非常に大事であった。以下、自分なりの「園芸のススメ」に関して、一つの事例を示したい。

「花育」という名の遊び心

自身が野菜の研究を行っている都合上、共同研究先に種苗会社さんがある。五、六年前から花の苗や球根を頂くようになって、学内の中庭に植え始めた。自己満足で始めた、単なる遊び心であったが、研究室の学生も気が向けば手伝ってくれたりした。いつしか、春と秋に多くの苗や球根を頂くようになった。当時、「食育」という言葉が新たなムーブメントとし

てわき起こっていったことから、勝手に「花育」プロジェクトと称して楽しんできた。数年ほど前から、「花育」という言葉をもホームページ上でも見かけるようになり、日本の多くの種苗会社も「花育」に力を入れていくように感じる。

個人的に推奨している「花育のススメ」としては、決して義務的な教育ではない（言ってしまうと「無責任な」）、趣味を広げる感覚であってほしいと願っている。そういう意味では、枯れようが雑草にまみれようが、基本的には自由であってよろしいと思う。また、これも個人的な感想だが、食育のように「育



▲中庭で育てたベチュニア
：中央をハート型にしてみた！！

の字が付くと、とかく責任感というか必ず実行しなければならぬような義務感すら感じる傾向がある。時として、楽しくおいしいはずの食卓が、「健康のために」おいしくなくても食べるという義務感で台無しという場面はなかるか。その点、花を育てる心は、そもそも「やりたい人がやればいい」の精神であり、花を育てなくても誰も死にはしないのである。それ故、決して強制されて花を育てるものではない。強制されて育てられた花は、花も喜ばないはずである。

そんな流れから、大学の附属幼稚園と附属小学校の園芸好きな先生へ、頂いた苗や球根をおすそ分けしてきた。それぞれ楽しんで花を育てられたことと思う。幼稚園の前を通った時に、ふと、きれいに花が咲き誇っている小さな姿を見た時、少なくとも大きな心のゆとりを私に享受させてくれた。

「気ままな園芸生活」を負荷なものと思わないようになるには、やはり強制ではない幼少時からの花との接触、できれば花を自分で育てる経験があればと

推奨する立場であるのは変わりない。ただ難しいのは、幼少時に言われなければ花は育てられないという点である。ここは矛盾点であるが、だからこそ、教育側が「育てなさい！」の立場であつては「花育」は台無しになってしまう。園芸が楽しく、「余裕・ゆとり」が得られるものであるということを無理に伝える必要はなく、誰かがやっている姿に興味をもって、ふと、手伝う（邪魔する）という姿勢で幼少時は十分なのではないだろうか。

大学の中庭でチューリップに水を撒まいていると、時々、大学附属のいずみナーサリーの幼児たちが興味津々で寄ってくることもある。教育施設における、花がある環境づくりの重要性を垣間見た気がした。また、咲いた花を摘み取れば摘んでもよいのである。ある日、水を撒いていると、咲いたチューリップを手折って私のところへうれしそうに運んできた幼児がいた。「きれいなねー」と言つて一緒に喜んだ。花も喜んでいるに違いない。

生活環境から花が減っていること

道路が舗装され、遊び場にも土や砂場が無くなり、花が育てられる環境が、特に大きな都市になればなるほど少なくなっている。こんな話題を種苗会社さんと憂慮している。最後に、現在の「花育」プロジェクトとして考えていることを少し説明したい。

花が育てられる環境にない教育現場は少ないと思うが、都市生活空間では明らかに花が育つ環境が減っている。緑化を進めるには何を行えばいいのか。もちろん、政策やNPO法人などの中で立派な活動が数多くある。さらに近年、温暖化が進行する中、夏の高温少雨や秋冷多雨で花き類の育ちが悪くなってきた。これは校庭や花壇でも同じ現象であり、一般生活では野菜の値段が高騰する機会が増えているのに気付くであろう。

そこで三年ほど前から、矮小化された「カンナ」(亜熱帯性植物、通常は1メートル〜2メートルの丈に

なるが、これは50センチメートル程度)の育成・増殖を中庭や空き地で始めている。一度、種を蒔いて根茎が伸びれば、現在の東京の冬を無事に越冬し、暑い夏前から秋まで大きな葉を広げて遮光に寄与するのかもしれないと考えている。

すでに、ゴーヤをすだれのように校舎の壁に育てて、日除けにするという小学校や中学校の話題を耳にした。2度〜4度も室内の温度が下がるという話である。

このカンナの場合は、子どもが遊ぶ校庭回りや日差しが強い箇所で育てることなどがかなえばと、やはり気ままにトライしている。「気ままな園芸生活」で、少しでも暑い夏が快適になればと願うこのごろである。でも、邪心はカンナに失礼なので、カンナの生命力と繁殖力に感謝しつつ、花が咲く春から夏を楽しむにしている。

(お茶の水女子大学生生活科学部食物栄養学科)